

新刊 Book reviews

□盛口 満：生き物の描き方 自然観察の技法。A5. 160 pp. 2012. ¥2,200+税。東京大学出版会。ISBN 978-4-13-063335-2 C1045.

さきに本誌 88 巻 2 号 (2013) で、同じ著者の「冬虫夏草を探しに行こう」を紹介したとき、たくさんの菌体のスケッチがあることを記したが、初めてその本に目が行ったのは、表紙カバーに描かれた冬虫夏草の見事な着色図だった。つられてパラパラめくったら、頁大の単色図がたくさん挿入されていて、こういう図を描くのがよほど得意な人なのだな、と思った。

本書は、著者がどのようにして生物画を描くのかを、制作過程に従って解説したものである。先の著書では中・高校の生物教師だった著者は、本書では大学のこども文化学科の教師として、学生や観察会を指導する立場となり、一つの図を描き始めてから完成するまでの、いろいろな段階を見せながら解説している。これと平行して、描く際に必要な観察点や心構えや予備知識を、わかりやすく述べているのだが、はなしがいつの間にか描き方よりも、対象とする生き物自体の話になってしまい、意表をつかれてハッとさせられる。

描く対象としては、昆虫、植物、きのこ、鳥、排出物などが事例として挙げられているが、それぞれにユニークな意見が述べられており、単なる描画指導にとどまらず、ものの見方や研究方針のヒントを、豊富に含む読み物としてお勧めする。

著者は描画にはロットリングを主に用いているが、フィールドでは使い勝手が悪いので、ユニボール (uni-ball) を使うとのこと。このあたりは本書に詳しいので省く。私は生物の図をマジメに描くような体験をしてこなかった。野外ではインクペンは、キャップを付けてポケットに挿していると、インク切れを起こしやすいうえ、悪天候では使えないので、敬遠してきた。描画には丸ペンや極細毛筆という先入観があった。著者は様々な筆記具を状況に応じて使い分けることを勧めている。(金井弘夫)

□鈴木庸夫、高橋 冬、安延尚文：草木の種子と果実。A5. 271 pp. 2012. ¥2,800. 誠文堂新光社。ISBN 978-4-416-71219-1 C0645.

632 種の果序、果実、種子のカラー図鑑で、果実と種子がまぎらわしい種類でも、一々分別して

示してある。種子は原則として方眼紙の上に置かれているので、大きさが把握し易い。たまたま背景を欠いた映像にはスケールバーがついているが、図鑑としては方眼紙の方が便利だと思う。トチノキのような大きなものでは背景の方眼がぼけるけれど、とくに不便とは思わない。植物の配列は APG III の「目」の順序で、5 頁に簡単な解説がある。口絵にキバナノツノゴマ、フタゴヤシ、ヒョウタンカズラなど、変わり者の果実や種子が並んでいる。また、いろいろなタイプの果実や散布形式について、簡単な説明がある。近頃はカキの実の中に種子があり、その中に胚が見られることを知らない学生がほとんどだから、こういう解説も必要かな... と思う。種子の形は動物の食性調査や考古学的調査にも必要な情報なので、「形が同じだから代表で..」と言わないで、あらゆる種類を網羅する図鑑を目指してほしい。(金井弘夫)

□梶浦 一郎：日本果物史年表。A5. 310 pp. 2008. ¥3,400. 養賢堂。ISBN 978-4-8425-0439-1 C3061.

「果物」とは、「永年性植物のうちで、枝や幹や茎が硬く木質化するものから収穫する果実で、人が食用とするもの」で、パイナップルやバナナは果物、イチゴは野菜である。スイカやメロンも野菜だと、聞いたことがある。

目次に示された時代区分は、約 70,000 年前～古墳時代 (13 pp.); 奈良時代 (7 pp.); 平安時代～安土桃山時代 (20 pp.); 江戸時代 (51 pp.); 明治・大正時代 (91 pp.); 昭和元年～30 年 (56 pp.); 昭和 30 年以降 (56 pp.); 平成時代 (8 pp.) と 8 区分されていて、それぞれの区分の冒頭に、その時代を総括した半頁ほどの要約があり、それから年次順に出来事が記されている。本書の性格上、果樹の導入、栽培、流通などに重点を置いた情報が多い。とくに病害の発生・拡大・駆除については、丹念に記録されている。

文献記録のない「～古墳時代」は、専ら遺跡の発掘調査記録に基づいているが、データが多いと思われる穀物についての記録は省かれているので、私には物足りない感じがするが、本書の性格上やむを得ない。

本書は、わが国の果物産業の盛衰を記録にとどめ、今後の世情の変化に対応して的確な判断を下す資料を残すことが目的である。「盛衰」と言っ

ても、その原因は優良品種や育生法の導入・開発、有害生物への対応、災害の影響、戦争による需給の激変、貿易摩擦による流通の阻害など、無数にあるのだから、それらの記録を丹念にたどることは、容易なことではなかったろう。

1870年(明治3年)に「玉川上水の羽村～内藤新宿間で通船が開始され、甲州葡萄が一日で運搬されるようになった」との記録がある。私は子供のときから玉川上水の途中の小金井村に住んでいて、1935年(昭和10年)頃の花見時の、上水界隈の賑わいを記憶しているが、水路の幅はきわめて狭く、急流で、船が行き交えるような広さではなかった。それに戻り舟に必要な引き舟人足のための施設もなかったように思う。中央本線が開通した1900年以降は、輸送は鉄道にとられて、通船事業は衰退したのだろう。

末尾に265件の引用文献表があるのだが、配列は引用番号順である。本文との対比には便利なのだが、著者名順だったらば、別な目的での文献探索にも役に立つだろうと思った。

凡例の最後に「主な果実が年表中で最初に記録されている箇所に□を付した」とあるので、食用植物の渡来や発見の資料として役立つかと思ったが、どうもそういう目的ではなく、「本書の中で最初に現われる箇所」という意味のようだ。頁をめくっているうちに「1923年、銀座千疋屋でフルーツポンチ開発。千疋屋の成功を見て神田須田町の万惣、新宿高野がフルーツパーラー開店」という記録を見つけた。こういう年表や目録は、専門外の者は手にしないことが多いが、流し読みしていると、思わぬ情報に行き当たることがある。

(金井弘夫)

□Z会指導部：入試に出る植物図鑑。B5. 95 pp. ¥900+ 税。Z会。ISBN 978-4-86290-057-9 C6045.

Z会中学受験シリーズの一つ。難関私立中学の入試によく出題される問題を紹介・解説したとある。通覧すると、植物の種類(被子・裸子植物84種類。シダ植物、藻類、菌類)や形や構造、機能の基本的なことが、中学入学までに、すでにあらかた習得されているはずだ、ということになる。それなのに、高校を出るまでに、あらかた忘れ去られてしまうように思われる。「量の上の水練」と言おうか、もったいないはなしである。もっとも、受験勉強としての生物、それも植物に重

点を置く者は僅かだろうから、期待する方が無理だろう。それより、自分が教室で話すときに、どんな話題や説明の仕方を選ぶかの参考になる点が少なくない。(金井弘夫)

□森田竜義(監)：花トレ初級編 これだけは知っておきたい花の名前300。A5. 111 pp. ¥1,400+ 税。平凡社。ISBN 978-4-582-54251-6 C0047.

見開き2頁に6種類の植物の花のカラー写真と、それぞれ2・3のヒントが示され、読者は空白の植物名欄に答を記入する。次の2頁に正解の植物名と共に、簡単な説明と2,3の近似植物の写真が示されている... という形式である。植物は「難易度」のレベルで仕分けされており、難易度1は24種類、難易度2は48種類、難易度3は42種類、難易度4は42種類ある。

難易度1のグループでは「日本人なら常識です」という見出しの下に18種類。ソメイヨシノ(サクラ)、ハス、アブラナ、ボタン、ウメ、カーネーション、ハギ、アヤメ、アザミ、ツバキ、レンゲソウ、ナデシコ(カワラナデシコ)、キキョウ、スミレ、パンジー、ツツジ、ツユクサ、リンドウが出題されている。出題頁の写真は各1枚で、ソメイヨシノ(サクラ)とアブラナは遠景、ハスは近景、ボタン、ウメ、カーネーションは接近写真である。

第1問の答は当然「サクラ」と思ったのだが、正解はソメイヨシノ(サクラ)だった。「日本人の常識」なら、これは「サクラ」以外はあるまい。第7問では答は「ハギ」で、設問頁にはミヤギノハギ?、解答頁にはヤマハギとミヤギノハギの写真が出ていて、これなら納得できる。第8問は設問の写真はノアザミ、解答はアザミで、解答頁にはノアザミ、ドイツアザミに加えてヒレアザミの写真と名が示されている。ヒレアザミはアザミ属ではないはずだが、「常識的」にはアザミの仲間としても悪くはあるまい。ところが、第10問にはヤブツバキの写真があって、その解答欄には「ツバキ」という名前と共に、ヤブツバキ、黒佗助、チャ、サザンカが示されている。この4種類をみんな「ツバキ」と呼ぶのは、日本人の常識から外れるだろう。答が「ツツジ」となる設問写真は、ヤエザキヤマツツジらしい。52頁のキンチャクソウは上下逆である。このあたりで、以後を見続ける気がなくなった。

このあと「花壇や鉢植えでよく見かける花」「木

に咲く身近な花」「野原や林でよく見られる花」「花の形が特徴的で、覚え易い名前の花」「野原や花壇でよく見かける花」「野や山でよく見かける花」「花壇や鉢植え、庭園でときどき見られる花」「野山でときどき見られる花」と、難易度4まで仕分けが続くのだが、野生品、栽培品入り交じって、仕分けの意味がうすい。

この種の「図鑑」の存在意義を否定するものではない。タンポポという名前の下にジシバリやブタナを入れ、ヒメジョオンをサクラではなくキクと呼んでも、大雑把な意味では間違いではないだろう。一過性の本ではなく、何度も見返せるような「図鑑」を工夫してもらいたい。それにしては、本書には編著者名がなく、序文もあとがきもない。監修者にだけ責任を押しつけるやり方は、どうもいただけない。
(金井弘夫)

□指田 豊・木原 浩：身近な薬用植物. A5. 302 pp. ¥2,400+ 税. 平凡社. ISBN 978-4-582-

51330-1 C0047.

近頃は病院でも町医者でも、処方に漢方薬を入れることはあたり前になったし、いまでも民間薬として用いられる植物もある。本書は医学関係の月刊誌に連載した記事を再編集したもので、四季に分けて60種類の植物につき、カラー写真（木原氏の作品）2頁、解説1頁、関係する生薬の概要と古典にみられる原植物の図または白黒写真が1頁という構成になっている。概要といっても専門家たちが見るのだから、基源植物、薬効、成分、薬理、処方など、手を抜かずに同じ形式で書かれている。250頁以降は、「その他の薬用植物60種」と題して、連載では収容できなかった植物について、「概要」の部分だけを列記している。

末尾の「薬用植物の歴史と今」（268–289頁）は、医学と薬用植物のかかわりを略説したもので、目を通しておくと、話の種に役立つだろう。

(金井弘夫)

88巻3号 正誤(2013) Errata in Vol. 88 No. 3 (2013)

ページ (Page)	カラム (Column)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
195	Author	↓2	Kanchi N. GANDI	Kanchi N. GANDHI
195	Author	↓2	MA00000 USA	MA02138, USA